

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。

本文には、問題作成のための省略や表記の変更があります。

① 次の文章は、ピアノの音の調子をととのえる仕事（調律師）をしている「僕」が、ある「青年」の家を仕事で訪れた場面をえがいたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

弦にこびりついた汚れを落とそうともう一度ティッシュに手を伸ばしたとき、ふと、さっきの写真が目に入った。瞬きをする。この少年。似ても似つかないのに、このかわいらしい少年が、この家の青年であることに気がつく。顔がよく見えなかったから、そしてあまりにも雰囲気が変わってしまったから、わからなかった。

手に取って、写真を見る。やはり、「面影があった。長い年月の間に何があったのかは知らない。でも、たしかにこの写真に写っている笑顔の少年が、何年か後にすっかり風貌を変えてピアノの調律を依頼する。青年に、笑みはない。交わす視線も、言葉も、ない。はっとした。①それでも、望みがある。ピアノを調律しようとしている。どんなに状態の悪いピアノでも、調律を依頼するということは、これからまた弾こうとしているということだ。希望があるということだ。

長く部屋の隅に忘れられたピアノがあり、ひどい環境下に打ち捨てられたピアノがあり、それでもこの仕事に希望があるのは、これからのための仕事だからだ。僕たち調律師が依頼されるときはいつも、ピアノはこれから弾かれようとしている。どんなにひどい状況でも、これからまた弾かれようとしているのだ。

僕にできることは、何だ。考えるまでもない。迷いもない。このピアノをできる限りいい状態に戻すことだけだ。小さな家だ。青年の気配は常にどこかにあった。作業に没頭していても、音の波を数えるために耳を澄ませている、隣の部屋で、青年と一緒に耳を澄ませている気配が伝わってきた。

調律を済ませたらピアノを売るのかもしれない。半分くらい、そう思っていた。そうであったとしてもいい。このピアノが、ここへ来たときの状態に戻すのは無理でも、ここで過ごした長い年月を味方につけて、今出せる精いっぱい音を出せるようになればいい。

「終わりました」

声をかけると、青年はすぐにこちらへ来た。視線は外したままだ。

「ハンマーが歪んでしまっているものがいくつかと、弦を止めるピンが緩んでしまっているものがありました。修理することも可能ですが、今はとりあえず応急処置だけにしてあります」

説明をしているときも、うつむいたままだったが、「試しに弾いてみていただけますか」

聞くと、しばらく間を置いて、かすかにうなずいた。

人と目を合わせもしない人が、人前でピアノを弾くとは思えなかった。だから、右手の人差し指一本で、鍵穴の上のドを叩いたときに、その一音だけでも弾いてくれてよかったと思ったのだ。

ド、は思いがけず力強かった。青年はピアノの前に立って、一本の指でドを弾いたまま動かなかった。ドだけでは調律の具合はわからないだろう。できればもう少し弾いてもらえないか、と声をかけようとしたとき、彼はゆっくりとふりかえった。顔に驚きが表れていた。②その目は一度たしかに僕の目と合い、それからまた外された。彼は人差し指を親指に替え、もう一度ドを弾いた。それから、レ、ミ、ファ、ソ、と続けた。③左手を身体の後ろで振るようにして、椅子を探した。椅

子にその指の先が届くと、ピアノのほうを向いたまま左手で椅子を引き寄せ、すわった。そうして、両手でドから一音ずつ丁寧に一オクターブ鳴らしていった。

試し弾きをされている間は、普段なら気が抜けない。自分の仕事を目の前で品定めされる緊張感だ。でも、今日は、調律前よりも空気が和んでいた。

青年が、椅子にすわったまま肩越しにこちらをふりむいた。

「いかがですか」

聞くまでもない。笑っていた。青年は笑っていた。まるで、あの写真の中の少年のようだった。よかった、と思うまもなく、またピアノのほうを向いたかと思うと、何か曲を弾きはじめた。

ねずみ色のスウェットの上下で、髪は起きぬけのぼさぼさのまま、大きな身体を丸めて弾いている。テンポがゆっくり過ぎてわからなかったが、シヨパンの子犬のワルツだった。

曲はしばらく像を結ばなかった。それが、だんだん、子犬の姿が見えるようになった。調律道具を片づけはじめていた僕は、驚いて青年の後ろ姿を見た。大きな犬だ。シヨパンの子犬はマルチーズのような小さな犬種のはずだったけれど、この青年の子犬は、たとえば秋田犬や、ラブラドル・レトリバーの、大きくて少し不器用な子犬なのだ。テンポは遅いし、音の粒も揃ってはいないけれども、青年自身が少年のように、あるいは子犬のように、うれしそうに弾いているのがよく伝わってくる。ときどき鍵盤に顔を近づけて、何か口ずさんでいるようにも見えた。

④「こういう子犬もいる。こういうピアノもある。」

一心にピアノを弾く青年の背中を眺め、やがて短い曲が終わったとき、僕は心からの拍手を贈った。

(宮下 奈都『羊と鋼の森』による)

問一 ——— ①「それでも、望みがある」とは、どういうことですか。

問二 ——— ②「その目は一度たしかに僕の目と合い、それからまた外された」とありますが、ここから「青年」のどのような気持ちを読み取れますか。

問三 ——— ③「左手を身体の後ろで振るようにして」とありますが、ここから「青年」のどのような気持ちを読み取れますか。

問四 ——— ④「こういう子犬もいる」とは、どういうことですか。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「人工内耳」という医療技術について、ふれておきます。これは、特別な機器を手術で頭に埋めることで、部分的な聴力の獲得を期待できることがあるという医療技術のひとつです。最近では、聞こえないおとなだけでなく、聞こえない子どもたちにも手術をし、音声言語の習得をさせようとする考えが広まりつつあり、ろう学校にも人工内耳を装用した子どもたちの姿が見られるようになりました。

① 耳鼻科の医師は、この手術を、聞こえない本人や、聞こえない子どもの親に勧めます。しかし、ろう者たちのなかに「手話とろう文化を否定するものだ」と強く反発する人たちが現れ、議論となりました。

「耳が聞こえないより聞こえた方が幸せだ」と思う人にとつては、この手術は朗報ということになります。実際、人生の途中で聴力を失い、音を聞く暮らしに戻りたいという気持ち強い人などの場合には、試してみたいと思える技術でしょう。

最大の問題は、この技術の背景に見え隠れしている、手話への誤解と否定の思想です。「聞こえないことは不幸だ」「早く手を打たないと、手話しか話せなくなってしまう」と、手話を話する者たちをまるで欠陥品のようにとらえる見方が、今なお聴者たちのなかにあります。最近も、耳鼻科医の団体の幹部が「五歳までに難聴が治らないと、言語がしゃべれなくなる」「一般的に字も読めなくなる」「想像力や考える力は耳が優位である」という講演をし、ろう者の全国組織が抗議したという事件がありました。このような②手話に向き合う気のない人こそ、まず、手話の世界での参与観察の経験を積んでほしいものです。

音声を話すことが人間としての幸福につながるはずだ、手話を話す生き方などなるべくない方がいいと信じて疑わない、聴者たちの幸せの押し付けがおそろしいと感じるのです。(中略)

また、手術や装用後の生活に身体的な負担があること、手術をしても必ずしも聴者になるとは限らないこと、部分的な聴力を得てもすぐに音声言語を話せるわけではないことなど、いろいろと課題があります。実際、手術をした子どもたちがみな聞こえるようになるのなら、普通学校に通えばいいことでしょう。人工内耳を装用した子どもたちがろう学校に通っている、理由はなぜなのかを考えたいと思います。

いくつかの短所や不確かさを考えると、そこまで無理して聞こえるようにならなくても、自然な手話での暮らしを続ける方がいい、むしろ、聴者が手話に対する誤解や否定の態度をあらためるほうが先だろうと考えるろう者は少なくありません。

みなさんがテレパシーの国の数少ない音声話者として暮らしているとき、テレパシーができるかもしれない、でも確実とは言えない、身体的な負担をとまなう新しい手術があると知らされたとします。「声で話して暮らすのは不幸です、早く手術しないと手遅れになってしまう、あなたのような人たちがなるべく社会に増えないようにするのが医療の務めです」と善意の笑顔で勧められたら、どうでしょう。私だったら、医療技術はさておいて、「まず君たちのその③傲慢な考え方をあらためることから始めてくれ」と求めると思います。

自分たちが少数派となり、多数派の幸せを強要される側になったときに、初めてその気持ちは理解できるのかもしれない。人工内耳を警戒するろう者たちのことを、「医療の恩恵を拒否する偏屈な人たち」のように見るのは、聴者の立場を一步も出していない自文化中心主義の姿勢です。ろう者が受けてきた受難の歴史や、それゆえに共有されている歴史観を含めて、文化全体の中で理解する文化相対主義の視点をもちたいものです。

〈注〉 ろう……耳が聞こえないこと。「ろう者」とは耳が聞こえない人のこと。

聴者……耳が聞こえる人。

参与観察……研究対象とする社会や集団の一員となって、ともに生活しながらその社会や集団を観察すること。

問一——①「耳鼻科の医師は、この手術を、聞こえない本人や、聞こえない子どもの親に勧めます」とありますが、「医師」はどういう気持ちで手術を勧めるのですか。

問二——②「手話に向き合う」とは、どういうことですか。

問三——③「傲慢な考え方」とありますが、「私」はどのようなところを「傲慢」だと思っていますか。

三 カタカナは漢字に直し、全体をていねいに大きく一行で書きなさい。

センリのミチもイツポから

平 3 0 中
国 5 5

四 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

あけがたには

藤井 貞和
ふじい さだかず

夜汽車のなかを風が吹いていました

① ふしぎな車内放送が風をつたって聞こえます

……よこはまには、二十三時五十三分

とつかが、零時五分

おおふな、零時十二分

ふじさわは、零時十七分

つじどうに、零時二十一分

ちがさきへ、零時二十五分

ひらつかで、零時三十一分

おおいそを、零時三十五分

にのみやでは、零時四十一分

こうずちやく、零時四十五分

かものみやが、零時四十九分

おだわらを、零時五十三分

……

② ああ、この乗務車掌しやしょうさんはわたしが、日本語を

苦しんでいる、いや、日本語で苦しんでいる

日本語が、苦しんでいる

③ わたくしは眼めを抑おさえてちいさくなっていました

あけがたには、なごやにつきます

問一 —— ① 「ふしぎな車内放送」とありますが、どういうことが「ふしぎ」なのですか。

問二 —— ② 「ああ、この乗務車掌さんはわたしが」とは、どういうことですか。

問三 —— ③ 「わたくしは眼を抑えてちいさくなっていました」とありますが、なぜですか。

2018
—
中
国

解
答
用
紙

受験番号
氏名

四

問 四	問 三	問 二	問 一

三

問 三	問 二	問 一

二

--

一

問 三	問 二	問 一

評点